

多数貼り使用例.. どちらを選びますか？

永吉 秀夫

伝え聞くとところによると、国際展というところでは、多数貼りカバーというものが高く評価されるそうです(同種切手が3枚以上貼ってあれば、それ以外に他の切手が少し貼ってあっても、ここでは多数貼りと呼ぶことにします)。JAPEXなどの国内展でも、近年はそういう傾向があるように感じられます。長い間国内では、1枚貼り適正使用例が有り難がられていましたが、世の中はかなり変わったようです。しかし単に見栄えが豪華であるという理由によって多数貼りが評価されることが多く、そこには科学的観点が欠けているように思えてなりません。

切手展への出品作品の構成は「サイエンスではなくアート」であってほしい、と宣う国際切手展審査員の大家もおられるそうです。しかし私としては、たとえ競争切手展で高い点がもらえなくても、「アートではなくサイエンス」という観点でコレクションを作る方針を変えるつもりはありません。こういう観点から、思うところを少し書いてみたいと思います。前もってお断りしておきますが、個々の収集家の方々がどのような方針でコレクションを作るかは自由であって、私の考え方を押しつけるものではありません。

まずは右と下の2通のカバーを見て下さい。どちらも同じ切手を3~4枚だけ貼った使用例です。右は国内書状15円時期の75円料金書留書状、下は国内書状10円時期の米国あて80円料金航空便書状です。

切手自体の使用例として、また郵便種別としての価値、またルックスの善し悪しという観点を別にして、純粋に多数貼りカバーとしての価値だけから選ぶとすれば、あなたならどちらを選びますか。



第2地帯あて航空便書状
TOKYO 1966.4.20 → 米国

書留書状 川崎上小田中 S46(1971).14

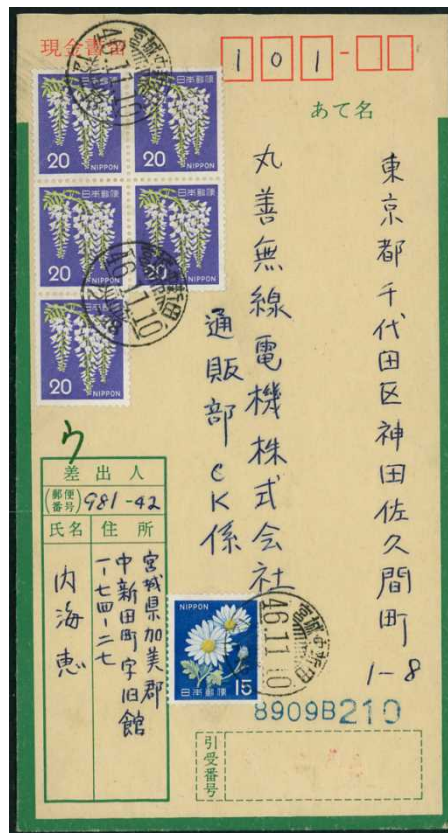
私なら 25 円 3 枚貼りの方を選びます。どちらも 1 枚貼りで対応できる普通切手は発行されていたので、多数貼りにしなければならない理由はありません。貼られている 20 円や 25 円切手は、それぞれの時期の 2 倍重量書状および定形外便基本料金用の普通切手ですが、一般人が手元に買い置く額面とは思えません。収集家の手元にあった過剰在庫品か、郵便局の窓口で局員が貼ったものでしょう。80 円貼りの方は、田型で貼られていることから、前者の可能性が高いと思われます。75 円貼りの方は書留便ですが、正月三が日明けの午前中に特定局の窓口で引き受けています。窓口の 75 円切手が切れていて、25 円 3 枚で代用したというストーリーが考えられます。

75 円切手の代用としては、60+15 円、50+25 円などいろいろな組み合わせが考えられますが、同種切手多数貼りとして自然なのはどんな組み合わせでしょうか。一般人が手持ち切手を使う場合は、書状用 15 円の 5 枚貼りでしょう。企業差し立てならば、単位額面の 10 円切手を使った 10 円×7+5 円もありですが、ちょっと枚数が多すぎますね。窓口で局員が貼る場合は、今回紹介の 25 円×3 という形が最も自然です。25 円という数は半端に見えますが、100 円の 1/4 であるという点では、単位額面と考えることもできます。海外では 1/4 という単位が親しまれていて、実際米国では、25 セントのコインが広く使われているそうです。今回紹介の 25 円 3 枚貼りは、25 円という単位額面切手の特性を活かしたスッキリした使用例と言えそうです。

ついでのので、他の切手を加えた多数貼りを 2 点紹介しておきましょう。写真下の左側は 115 円料金の現金書留便で、書留料金分を 100 円切手の代わりに 20 円 5 枚貼りとした例です。なぜ 20 円切手が使われたのかという事情はよくわかりません。2 倍重量

書状(1972 年 2 月の料金改定後は基本重量)以外にこれと言った用途のない 20 円「ふじ」の使用例としては魅力的ですが、あまり必然性のない使用例と言えそうです。

右側の速達便は著名収集家差し出しで、貼られている 10 円切手は 10 枚ペーンの切手帳切り抜き品です。単位額面であり、かつ書状用額面でもある 10 円切手を可能な限り貼ってある点で、多数貼りとしての価値は高いカバーであると考えられます。



現金書留書状 宮城中新田 S46(1971).11.10



速達書状 千種 S30(1955).5.18